

終章 本論文の総括と今後の課題

第一節 各章の内容の整理

第一部(第一章・第三章)では、河内国丹南郡岡村の豪農岡田家と同郡伊賀村西山家の経営分析を、金融活動を中心に行った。

第一章で扱った岡田家は、所持高一〇〇石を越える中核豪農(後述)であり、その金融活動は数郡に及ぶ。そのなかでも隣々村までの範囲を地域金融圏と設定し、恒常的な金融関係を結んでいたと定義し、この金融関係が貸付相手(村内の中上層)の経営の維持、村の成り立ちに必要不可欠であったと、その返済期間の分析から想定した。また領主貸を岡田家の経営の重要な要素として位置づけるとともに、都市両替商との関係を恒常的な関係ではあったがその経営に占める位置は限定的であった、とした。そして、岡田家のような地域金融圏で中核的な位置を占める豪農を中核豪農、その貸付を受ける豪農を一般豪農と概念設定し、幕末の畿内はこのような中核豪農が群立している状況であった、と論じた。

第二章は、第一章を受けて、岡田家の近代における金融活動の分析を明治三四年(一九〇二)まで行なった。岡田家の金融活動は明治一五年には停滞期に入っていくこと、その停滞は明治政府の私的所有権確立政策を基因とするものであり、証文内容とおりの返済と返済期間の短縮化により、全体の金融規模は縮小していくことを実証した。また明治二七年に岡田家が開業する岡田銀行(個人銀行)は、停

滞する金融活動の打開策であったと考えられることと、同銀行の経営も近代以降の証文内容とおりの返済と返済期間の短縮化傾向の延長上に位置づけられることを論じた。

第三章では、岡田家の地域金融圏(隣々村)にある伊賀村西山家の天保後期以降の家経営と地域状況の分析を行った。同家の金融活動の分析からは、岡田家と同様の利子取得を目的とする金融活動を半ばは行いながらも、幕末に至るにつれ同家の小作人への貸付と村内小前層への貸付が増加することを明らかにした。西山家は岡田家からも貸付を受けていた。この分析から、岡田家の金融活動は、一般豪農を通じて村内小前層の成り立ちにも役立っていたことが明らかになった。また、地主経営の分析では、先行研究の枠組みに抛りながらも、西山家の小作経営は未進の減少を企図して小作人一人あたりの宛口高増大を図っていたことを明らかにした。

*

第二部(第四章・第五章)では、信濃国更級郡今里村の豪農更級家の金融活動と、支配が錯綜する信濃国の地域的特質と領民の成り立ちとの関係について分析を行った。

第四章では、更級家の「個性的」な広域金融活動の実態を明らかにした。同国内八郡、越後国頸城郡にまで展開したその活動が、文化期に地域において高額な金融需要に対して貸付が不足する状況において展開していたことを明らかにした。そして、更級家の貸付は証文主義の徹底と藩や幕府による裁許を特に重視していることを明らかにした。このような金融活動は、領主権力による裁許を契機と

しなければその返済はほとんど進まず、金融活動としては失敗に終わったといえよう。また、先行研究に抛りながら、安曇郡の豪農金融が、畿内より規模は劣るものの天保期から畿内と類似の発展経過をたどりつつあることを指摘した。

第五章では、在地からの訴願や要求への対処をどのように行うのか、という観点から幕藩関係の分析を行った。その際に、松代藩郡奉行や廻村する下級役人と幕府代官所元々といった支配機構内の階層と相互の対応を解明するとともに、在地とのやりとりを明らかにし、二つのルート（「正式」と「内々」）による重層的なやりとりが不可欠であったことを論じた。このことは、藩と代官所が、お互いの領民の農業経営の維持、金融の維持のために密接に協力していたことを意味している。第四章で領主権力の裁許を最重要視していた更級家のような豪農が出てくるのは決して特異なことではなく、領主権力の対応まで折り込んで地域の課題を解決する能力を村の側で身につけていたことがその背景にあった、といえるだろう。

*

第三部（第六章・第七章）では、東京府南多摩郡・西多摩郡の中小地主とそれにすら満たない者の明治期の地域の課題への取組を分析した。

第六章では、明治九年に発行が開始された農業雑誌の発行部数の推移を明らかにし、明治一〇年代前半にかなりの部数に達することと同二〇年代前半がそのピークになることを明らかにした。そして、その受容者である鈴木静蔵の農事改良への取組を、家経営の内容に

まで踏み込んで分析を行った。また、各農民層への農事改良の成果の行き渡りとしては、上中層農民は種子の改良と化学肥料の導入の両局面で成果を享受でき、下層農民は種子の改良の点についてはその成果を受け取れたものの、肥料の面ではその成果は限定的であった、と論じた。分析対象とした鈴木静蔵の取組は明治二九年から始まるものの、農業雑誌の発行部数の推移をみると、静蔵のような農村での主体的取組は明治一〇年代前半から同二〇年代前半が興隆期だと考えられる。

第七章では、鉄道の開通により大きな影響を受ける山村地域の政治活動（道路請願運動）について、その中心人物であった川口昌蔵に着目して分析を行った。昌蔵は村内の階層構成では下層に位置する者であったが、名望家秩序の中での調整能力や府官僚・府会議員との強い関係を通じて隧道開通という地域の課題の解決に尽力し、それを成し遂げた。この分析結果は、隧道開通の成果を享受する階層の者が必ずしも政治活動に身を投じるという訳ではなく、府官僚や府会議員とのパイプを持つこと自体が重要な意味をもっていることを明らかにした。また、昌蔵の活動した成木村は、組・大字・行政村という構造を持っているが、村内の利害関係が二つに割れる中で村長の指揮下で活動を行っていることが重要であった。

第二節 研究史上の意義

以上のように『一九世紀の豪農・名望家と地域社会』と題して、

本論文では三部・七章に分けて論じてきた。以下では本論文全体で筆者がもつとも主張したかったことを、五つの項目に分けて論じていきたい。

(1) 地域社会のイメージ・地域社会論の方法

本論文の主張点の第一として、地域社会のイメージ・地域社会論の方法について述べていきたい。第一章と第三章の分析では、所持高一〇〇石以上を持つ岡村の岡田家と、所持高五〇石程度の伊賀村西山家の主に金融活動の分析を行った。そして、前者を地域の中核豪農、後者を一般豪農と区分し、その貸付相手・範囲と都市両替商との関係・領主貸の有無の違いを明らかにした。

このような地域社会の分析を行った先行研究に、岩田浩太郎によるものが挙げられよう。岩田は、大規模豪農と中小豪農との区分を行い、その編成・連繫を論じている。大規模豪農の影響範囲を論じている点では筆者と同じではあるが、中小豪農の経営分析を欠いている点が不十分である。また、豪農と小前層との関係についての分析が窮恤活動や不作期の出入の問題に限られており非常に手薄である。地域社会を論じる上で重要なのは、豪農間の関係分析もさることながら、分析した豪農間でなされた行動が、小前層の成り立ちとどのように関わっているのかを論じていくことである。小前層との関係を分析する際には、部分的に分析するだけではなく、豪農の普段の経営活動と小前層との関係を分析しなければ十分とは言えないのである。

この点で筆者は、第三章で西山家の金融活動を具体的に分析し、天保年間から同家の小作人への貸付が小作経営にとって不可欠であったこと、地域の状況が不穏を極める文久期以降は、村内小前層への貸付が増大していき、その返済が不調であることから、これらの貸付は幕末の状況の中で小作人・小前層の成り立ちに重要な機能を果たしたことを明らかにした。そして、この西山家に貸付を行っている岡田家の金融活動も、間接的ながら地域の成り立ちのために機能した、と位置づけた。

また、岡田家の金融活動を分析する際に、他村の土地を所持した場合に相手の村の側の「協力」が得られなければ、小作料が入って来ず、転売もうまくいかないことを明らかにした。岩田や山崎圭の地域社会論についての先行研究や久留島浩や山崎善弘などの政治活動の分析を中心とした先行研究では、村落共同体研究の成果・視点を地域社会論に取り込んでいく点が不十分だった。この点でも、地域社会論に対して重要な指摘をなし得たと考えている。

以上の二点の分析結果は、地域社会論における従来のイメージに修正を迫るものではないだろうか。先述の岩田や山崎圭による地域社会のイメージは、豪農による地域の編成を重視し、幕末に顕在化してくる豪農と小前層の矛盾を豪農が政治的に弥縫していくとする階層間矛盾を強調するイメージである。一方、久留島や山崎善弘などのそれは、その政治的活動を注視したことにより、豪農層の政治的役割を強調するイメージである。これに対して筆者は、地域において村落共同体機能は幕末段階でも岡田家の土地所持を広げること

に対してそれを抑止する機能を果たしていたし、岡田家の貸付も西山家を通して小前層の成り立ちを支える機能を果たしていた点を重視している。岩田らのイメージよりも、共同・「協同」的であるとともに、社会構造を重視している点で久留島らのイメージとは大きく異なっている。

筆者は、豪農層の営為は、その営為が地域の小前層に対してどのような役割を果たしたのかを、政治面と経済面・経営面双方にわたって分析してから評価する必要があると考える。この点は、前者（岩田・山崎圭）と階層間の関係を押さえて分析する点で共通するが、小前層の成り立ちに対して豪農層の行動や経営がどのような影響を与えたのかを分析・評価することを重視する点で異なっている。後者（久留島・山崎善弘など）とは政治面での豪農層の主體的営為を評価するという点で共通するが、経済・経営面での役割をも重視する点で異なっている。それに加えて、経済面・経営面でも都市・領主との関係も組み込んで検討していく必要がある。岩田の分析には、都市との関係は組み込まれているが領主との関係が不明であり、山崎圭の場合は両方とも不明である。筆者の分析は、一般豪農と小前層との関係だけでなく、中核豪農と一般豪農との関係も分析し、さらに都市・領主との関係も組み込んでいる点で、ひとつの方法論を提示しえたのではないか。このように、都市・領主—中核豪農—一般豪農—小前層という重層構造全体が、小前層の成り立ちにどう関わっているのか、という全体性・総合性をもった分析を積み重ねていく必要がある。この点で、中核豪農・一般豪農の経営分析を行ったう

えで、小前層との関係を分析していく必要性を再度強調しておきたい。

(2) 金融活動の背景への着目と地域間比較の重要性

第一章の分析では、訴訟事例の検討結果から、少なくとも文政期以降の河内国は金融の借り手よりも貸し手が多い、借り手有利の市場構造であったことと、慶応期には藩札の発行に中核豪農が連合して関わることにより紙幣供給量自体を増大させる活動までをも行っていたことを明らかにした。これまでの畿内の金融研究については、福山昭によるもの⁽¹⁾がもっとも重要であるが、この二点については全く指摘がなされていない。岡田家の貸付利率は、一八世紀末には年一五%程度(月一)が主流であったが⁽²⁾、一八五〇年には年一〇%を切る水準(月八)が平均的であった。これも、借り手有利の市場構造が進展していったことを表している。従来の金融研究では、貸し手と借り手の相対関係の分析を重要視はしても、個別の貸し手・借り手を取り巻く環境について顧慮を払ってはこなかった。借り手有利の市場構造であれば、複数の貸付相手からも借入を受けられ、場合によっては第三者からの借入によってすでに借り入れている貸付を返済するなどの対応も取りうるであろう。

第一章で得た視点を別の地域で生かしたのが第四章である。信州更級郡の更級家は合計九郡にもおよぶ広域金融活動を展開したが、これは文化期の地域における高額金融需要への供給不足が背景にあった。更級家の貸付エリアでもあった松代藩領の山中地域では、天

保期にも融通機能が滞っていることが問題となっている⁽³⁾。このように、地域社会における金融活動の分析では個別の関係をみることも重要だが、家経営を取り巻く「金融環境」自体も分析していく必要があるのである。

また、信州の安曇郡の事例では、天保期以降、地域金融圏的なものが出来つつある状況を指摘した。これは、河内と信州両地域での共通点と言えよう。金融需要への供給不足の側面について、安曇郡の分析を行った熊井保の分析においては、この点について指摘がなされていない。複数の地域を同一テーマで分析して比較していくことによって、ひとつの地域だけ分析してはなかなか位置づけにくい問題が発見できるのであり、このような方法は地域社会論の進展にとって大変重要と考えている。

(3) 金融における近代の萌芽、という視点

これまで、地域社会論で近代社会との連続性を論ずる場合には、組合村入用(近世)と大区小区制下の入用構造(近代)の共通性⁽⁴⁾、国訴の代表委任の構造(近世)と代議制(近代)の類似性というように、政治面に注目が集まっていた。これに対して、近代史研究の成果である武相困民党などの分析では、証文通りの貸付金の取り立てに対して民衆が蜂起する根拠を近世以来の百姓成り立ち・百姓相続要求に求めている一方、この証文通りの貸付金取立の近世期の源流については特に言及がなされていない。

第四章の更級家の広域金融活動の分析では、畿内と異なり長期的

に貸し付けを行い利子を取得するといった金融慣行の不成熟から、貸付範囲が広域であるとともに、その証文主義の徹底と領主権力・裁判への依拠が特徴的であった。このような更級家の貸付は、この二つの特徴から近代的証文主義の萌芽と位置づけられよう。

また、第一章の岡田家の金融活動は、先行研究の枠組みでは「高利貸し」金融と位置づけられよう。大塚は、高利貸しの主体はとして⁽⁵⁾、寺社名目金と村の外部から入ってくる高利貸しを主に挙げている。興味深いのは、岡田家自身も惣代となつて、丹南郡・丹北郡・古市郡の惣代庄屋が嘉永期に寺社名目金貸付の規制を代官所に願ひ出ていることである⁽⁶⁾。ここでは、証文手数料の不実⁽⁷⁾・証文通りの取立・裁判の際の南都役所への長期の留め置きが批判として挙げられている。これは、すでに大和国で谷山正道が明らかにした寺社名目金への規制運動で指摘されている内容と同じである⁽⁸⁾。また、更級家の貸付とほとんど同様の特徴が見出せよう。

同じく高利貸し、と位置づけられる更級家と岡田家の金融活動も、証文主義の徹底と裁判への依拠を基準にしたならば異質なものであろう。筆者は更級家や寺社名目金による先述のような特徴をもった貸付を「近代型高利貸し」と定義することを主張したい⁽⁹⁾。このように、大塚の定義する高利貸しから、「近代型高利貸し」を分離することにより、近代との連続性を明瞭にして分析することが可能になり、ひいては岡田家の金融活動の近代での変化(後述)も区分して分析できるからである。

(4) 近世・近代を通じて分析する重要性

近世と近代を一〇〇年間にわたり分析した第一章・第二章からは、次のような点が明らかになった。①まず、近世期の特徴として長期に貸付を行い、相手豪農の家経営の維持や村の小前層への貸付に役立つように貸付を行って岡田家も利子を取得するというのが理想的な貸付であった。②それが近代の私的所有権の確立政策で貸付期間が短くなり、金融規模も縮小していったこと。そして、個別債権への権利は強まったが全体としての利子収入は減少するという皮肉な状況が生まれた。③一方、近世の借り手有利の金余り状況は、近代になっても続いて明治二七年開業の岡田銀行の経営にも重大な影響を与えた。つまり、①と②は近世と近代との断絶面、③は連続面を表している。

これまでの近世史研究者は、明治ゼロ年代（明治元々九年）までを自らが史料をみて分析を行うことが主流であった。踏み込んでも松方デフレ期くらいまで自らの分析はとどめて、その後は近代史研究と連繋を図って見通しを述べるのが主であった。もし、第一章・第二章の分析を、筆者が近世期のみ（第一章）で留めてしまった場合には、②の点を正確に理解することは難しく、近世期の特徴の過小評価に繋がったのではないだろうか。そして、③の借り手有利の状況が、明治後半に入って開業する岡田銀行の経営状況にまで影響を及ぼしているという連続面を見いだすことは困難だったに違いない。また、明治一〇年代の分析で留めてしまっていた場合には、近代になつて変化した金融慣行と岡田銀行の貸付の在り方の連続面について

でも論及することはできなかつただろう。

このように、近世史研究者が明治後半期まで自ら史料を見て分析していく必要性は、すでに落合延孝によって指摘されている。筆者の分析は、金融活動という一分野ではあるが、そのような研究方法・スタイルの有用性・重要性を明らかにしたといえよう。

(5) 近代社会の多様性

第六章の鈴木静蔵の農業雑誌受容の事例では、近代的な農事改良の講演会の帰途に周囲の無理解を歎く静蔵の姿があった。このような周囲の人びとは、鶴巻孝雄らによる先行研究によると「民衆」とされ、近代社会に懐疑的な人びととして定義づけられている。静蔵はこのような状況の中で、農業雑誌の定期購読を行い、時には投稿まで行う熱心な読者であった。また、平尾青年会の主宰者としての活動も行ったが、ここでも静蔵は中心メンバーで、周囲の理解もそれほど高かつたとはいえない状況であった。

従来、農業雑誌に着目した研究はほとんどなく、またその受容した成果を実際の農業経営にどのように生かしたのか、そしてそれが周囲にどのような影響を与えたのかを階層の差異に着目して明らかにした研究はなかつた。この点で上中層には十分な成果をもたらしたが、下層には限定的であったとした第六章の成果は、周囲への影響を更に分析するという課題を残してはいるものの意義あるものといえよう。

また、「民衆」の無理解のもとで活動を行う静蔵のような中小地主

にとつて、出版メディアの果たした役割は、農業技術の伝達にとどまらず、精神的な支えとなっていた、という側面を指摘したい。農事改良の意欲がなえそうになったとき、読者投稿欄にうかがえるように全国に自分と同じような同志がいる、ということは大きな励みになったはずである。また、郵便による配達制度により、書物のネットワークなど人的結合によらずに⁽¹⁰⁾、直接これらの雑誌を手にするものが出来た点も大きい。農業雑誌のような近代的な「知」にアクセスする環境は非常にオープンで開かれたものであり、「近代化」が進む上で実用面・精神面で大きな役割を果たしていたのである。

第七章の川口昌蔵の政治活動(道路請願運動)の分析では、中小地主でもない昌蔵が府官僚・府会議員や地域の名望家層に政治活動を行って課題を達成する過程を検討した。昌蔵のように、階層的には「民衆」に属する者が、地租改正を実見したことから政治活動に目覚めていく様子は、階層的に下位の者であっても地域に「文明」を導入していく存在となり、名望家層以上に「名望家」的な役割を果たすことができたことを意味する。このように、近代社会の政治過程というものは、名望家層・村落上層のみに独占されるものではなく、官僚・議会との太いパイプを築き得れば、むしろこれらの者よりも重要な役割を果たせるのである。第二章の検討によれば、岡田家は経済的には最上層に位置しながらも、明治期の政治活動は消極的である。経済的には名望家層に属しながらも、政治活動に消極的なこれらの者たちの存在は石川一三夫⁽¹¹⁾によりすでに明らかにさ

れている。近世にくらべて、近代の政治活動に参加する者たちは多様であり、流動的なのである。

このような名望家層の分析については、筒井正夫による名望家層と中小地主との役割を分けて考える二つのセット論、がある。これは、大規模な地主は名望家として県会議員などになって地域に利益を誘導する役割を果たし、中小の在村地主は農会などの活動に居村を中心に活動する、というものである。筒井の主張は、名望家層による「同意の調達」という観点から、その地主の階層性の分析とも合わせて論じている点で重要である。しかし、第六章での出版メディアによる鈴木静蔵の農事改良知識受容の意義や、経済的には下層である川口昌蔵のような者が政治的に重要な役割を果たすことは、近代社会の「開かれた」一面を表している。そして、この「開かれた」一面は、いずれも「文明」という価値観で共通している。地主制による階層差は厳然としてありつつも、近代社会の一面には、このように階層を飛び越えるある種の共通性が通底しており、これが近代社会の多様性を生み出している、といつてもいいだろう。

だとすると、近代の地域社会論においても、筒井のいう中小地主や川口昌蔵のような経済的には下層の者への着目、分析こそが重要になってこよう。そして、経済的に有力な者の経営分析も合わせて行うことによつて、地域社会の政治・経済活動全体を明らかにしていく必要がある。その分析方法は、(1)で述べた方法論と同様の方法をとりつつ、鈴木静蔵や川口昌蔵のような個人の活動を地域社会に位置づけていく、といったものになるう。

第三節 まとめと今後の課題

以上の内容を方法論の観点からまとめると、(1)近世における中核豪農(大規模豪農)と一般豪農(中小豪農)相互の分析と小前層との関係の重視、(2)地域間比較の重要性、(3)経済面でも近代の萌芽を探る必要性の提起、(4)一九世紀全体にわたっての分析の重要性の強調、(5)近代社会の多様性の重視、の五点になる。

このうち、(1)と(5)の分析を行う際には、編成よりも「圏」としての分析を行う必要性を強調したい。圏、とはいったんは中核豪農と一般豪農の経営分析を先入観なく行つたうえで、その相互関係を評価していく場合の範囲を意味している。本論文では、金融活動(地域金融圏)に限って分析を行った。今後は、地域金融圏に類するような中核豪農を基軸にした経済圏を主要な経営部門ごとに設定し、それを重層的に積み重ねて地域経済圏として概念設定を行い、その上で政治的枠組・政治的役割との関係を分析していく方法論を提唱したい。政治的役割の分析をまだ行っていない点で、岩田・常松隆嗣の先行研究と比べて筆者の成果はまだ不十分である。地域社会における政治的役割の分析については、渡辺尚志より「地域政治史」の方法がすでに提唱されている¹²⁾。地域経済圏の分析と地域政治史の分析をあわせ行うこと、つまり、地域の生産・成り立ちの状況を中核豪農と一般豪農双方の経営状況から明らかにして、社会変容をもたらす最も深い地平の分析を十分に行つたうえで、政治的活動への規定性・関連性を明らかにしていく方法、といえよう。

また、このような中核豪農が存在しない地域、つまり一般豪農が併存している地域もあるだろう。その場合は、その存在しないこと自体が地域の特質として重要な論点になってくる。そして、このような分析を積み重ねていくことにより、地域社会論の総合化も視野に入ってくるものと考えている。

(2)について、第四章では信濃国安曇郡の事例を取り上げた。これによると、信濃国でも畿内からはかなり遅れはするものの、天保期には地域金融圏的なものが生成しつつある。このような地域金融圏の成長は、文政二年からの幕府の改鑄(悪鑄)政策の影響を受けた可能性がある。従来、この改鑄の影響は、数量経済史研究において在地社会で農工業を進展させ工業化社会の前提として重要であったとの観点から論じられ、また、幕末の開港時における物価上昇においてこの改鑄がどのような影響を及ぼしたのか、という点からも論じられてきた¹³⁾。しかしながら、本論文のような分析を広汎に積み重ねて行けば、幕府の改鑄政策が地域内の各階層に与えた影響の度合いを論じることが可能になってくるだろう。つまり、国家レベルの経済政策が列島内の各地域社会にどのように影響を与えたのか、を論じうるといふことである。現在、地域社会論の次なる展開として、藩地域論・藩世界論・藩社会論¹⁴⁾が盛行している。さらにその上位の国家による規定性の分析という点でも、地域金融圏の分析は可能性を持っていると考えている。

(4)について、これまでの負債農民騒擾の分析では、無年季の質地請戻し慣行の問題が関東・東山地域を中心に論じられてきた。

畿内においては、豪農間の金融の規模縮小が、地域の小前層にどのような影響を与えているのか、という点が次に重要になってくる。本論文では果たせなかったが、伊賀村西山家の近代における金融活動の分析により、その点が明らかになってくると考えており、次の課題としたい。

そして、このような金融関係の「弛緩」が地域政治に与える影響はどのようなものであろうか。明治一五年に岡村が原告となつての野中村・野々上村との用水争論においては、両村とも岡村と事を構えること自体を躊躇している様子は見られない⁽¹⁵⁾。金融関係が弱くなつてきたから、このような争論が行われたのか、それとも金融関係が強かつた近世にも、金融関係に頓着なく用水争論が起ころのたろうか。この点も、今後の課題となる。

*

以上をまとめれば、中核豪農・一般豪農双方の経営分析を近世・近代を通じて行うことを土台とし、その経営動向・地域経済の動向と地域政治の課題を、経営動向・地域経済圏の範囲と地域政治が対象とする領域のズレにも留意しながら明らかにしていく、一九世紀地域社会論の構想、といえるだろう。地域経済圏の分析から地域政治史との接点を見いだす構想、とも言えよう。本論文で明らかにしてきたのは、その方法論の有効性を確認しながら前進するための一部に過ぎないが、この構想にのつとつて今後の課題を果たし、全体構造の構築につなげたい。

註

- (1) 福山昭『近世農村金融の構造』(雄山閣出版、一九七五年)。
- (2) 小酒井大悟「一八世紀畿内における豪農の成長過程一河内国丹南郡岡村岡田家を素材として」『畿内の豪農経営と地域社会』(思文閣出版、二〇〇八年二月刊行予定)。
- (3) 小田真祐「松代藩家中と天保七年飢饉一寺内多宮を中心に」(渡辺尚志編『藩地域の構造と変容』岩田書院、二〇〇五年、の続巻として二〇〇八年刊行予定の論集に所収予定)。
- (4) 奥村弘「大区小区制」期の地方行政制度の展開一兵庫県赤穂郡を中心として」『日本史研究』(第二五八号、一九八四年)。
- (5) 大塚英二『日本近世農村金融史の研究一村融通制の分析一』(校倉書房、一九九六年)第五章。なお本論文序章も参照されたい。
- (6) 岡田家文書A一三一八一。全文は以下のとおりになる。なお、本文中に掲げた点は、嘉永三年に比定される願書(A一三一八一三)による。
乍恐口上
河州丹南郡丹北郡古市郡村々
一今般融通方として宮家其外諸寺院御修復手當金銀且祠堂金銀之名目を以御貸下ケ相成候義者、先年者及承候得共在方ニ而者右様之義金銀恩借仕候義之無数仕、近年所々御貸附役所出来候ニ付而者手次世話方人之中ニハ不実之致方御座候而分限不相應之金銀を借請、尤借人之砌者利足下歩之様ニ御座候得共入用等多分相掛り終ニハ過分之滞銀ニ相成返済之砌難渋之次第申敷キ候得共堅く御取用無之、先祖・持来り候田畑建屋敷取渡候及始末敷敷奉存候、勿論是迄末々百姓共江申論し置候得共、近頃ニおゐてハ□□手段を以□□申談し

印形相違之以廉も不取調ニ而貸し借返済之砌ハ嚴敷御取立ニ相成皆済込ハ右御役所江御引附ニ相成誠ニ以及難渋、夫故潰百姓出来歎ケ敷奉存候、何卒御上様之御憐愍ヲ以向後末々百姓必至難渋之者村役人共・如何様共助合仕其上下方ニ而助方難及候節者 御支配御役所被奉申上奉蒙御指図百姓取続為致方奉存候間、何卒右之趣可相成義ニ御座候得ハ、其筋々江も此段被為仰立被成下右躰之始末不相成様之御賢恵⁽¹⁾之程乍恐御願奉申上候、右御聞済被為成下候ハ、村々一同難有奉存候、以上

右村々惣代菅田村定助、田井城村龍藏、岡村伊左衛門

平尾村藤右衛門、野中村猪十郎

嘉永式酉年六月廿三日

鈴木町御役所

⁽⁷⁾ 証文は貸付額一貫匁（返済額は一貫匁）なのに、貸付時に証文作成料として二〇〇匁を差し引き、実際に受けた貸付額は八〇〇匁であること。

⁽⁸⁾ 谷山正道「大和における名目銀貸付規制運動の展開」『地方史研究』第一六八号、一九八二年、のち『近世民衆運動の展開』高科書店、一九九四年に所収。

⁽⁹⁾ 三浦俊明『近世寺社名目金の史的研究』（吉川弘文館、一九八三年）。ここで興味深いのは、遊行寺の名目金貸付の取扱役を務めていた青木彦右衛門等は明治一〇年に株式組織に基づく近代的高利貸金融機関の株主へと転身を図ったことである。困民党などと対峙する金貸会社など過酷な債主と取扱に入るような村々の名望家・豪農層とは、近代的価値観の受容という点では共通しているものの、負債者の立場に理解を示すかどうか、という点では異なっている。この金貸会社の源流を近世において探り当てることは

重要な課題と考えており、三浦の明らかにしている事例はその一つである。

⁽¹⁰⁾ 近世の書籍ネットワークとこれらの近代的な読書とのありかたの違いについては、今後考えていきたい。

⁽¹¹⁾ 石川一三夫『近代日本の名望家と自治』（木鐸社、一九八七年）。

⁽¹²⁾ 渡辺尚志編『近世地域社会論』（岩田書院、一九九九年）。

⁽¹³⁾ 新保博『近世の物価と経済発展—前工業化社会への数量的接近』（東京経済新報社、一九七八年）、山崎隆三『近世物価史研究』（塙書房、一九八三年）。

⁽¹⁴⁾ 渡辺尚志編『藩地域の構造と変容』（岩田書院、二〇〇五年）、岡山藩研究会編『藩世界の意識と関係』（岩田書院、二〇〇〇年）、岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究』（清文堂出版、二〇〇一年）ほか。

⁽¹⁵⁾ この出入については、渡辺尚志「村の用水・地域の用水」（歴史科学協議会編『歴史が動く時 人間とその時代』（青木書店、二〇〇二年、所収）。のち同著『豪農・村落共同体と地域社会—近世から近代へ』（柏書房、二〇〇七年に再録）。